

日常生活で、「まわす」、あるいは「回す」、という動作は、余りにも頻繁に使われている。「ねじ」は「回す」と縮まり、時計回り(右回り)で締める。逆に、緩めるときは、反時計回り(左回り)になる。一方、反時計回り(左回り)で締めるねじもあるが、マイナーで、「逆ねじ」と呼ばれ、プロローグの「回す」と「ねじ」≡現代編Ⅱで述べたように、日常的には規格化され、淘汰されてしまった。

一方、「縄」を土器の表面に当てて回転し、その文様を土器に残した古代の縄文人は、素材のヒモを束ねたのち、捻<sup>ひね</sup>って繕<sup>よ</sup>り合わせたが、束ねて繕り合わせる≡古代編Ⅱでは、右回り、左回りの双方を使って、土器の装飾を大らかに、また生き生きとさせた。

現代に至って、時計回り(右回り)と反時計回り(左回り)は、ひろく三次元の図形や物体、物質へと展開される。左右の「らせん」へ、また、鏡に映した「鏡像体」を識別する原理となり、統合して、この性質を、「キラリティー」Chiralityといい、キラリティーをもつことを、キラル Chiral である、という。本書では、「本文その二」で、科学の分野、特に化学の領域で、極めて重要な事項とされる「モレキュラー・キラリティー」を論議した。

また、「本文その二」では、図形と造型に関わる、渦から螺旋への展開について考察し、日常身近なロープの話し、しめ縄の話しを取り上げた。

「本文その三」では、「対掌性」を認識した古代の日本人に注目して、縄文時代を追憶する。土器を創作した古代の日本人は、土器の装飾として、左巻きと右巻きの縄文を配置した。

縄文土器の文様が左巻きと右巻きの縄文をもつていて、縄文人は、左右双方に繕られた「キラリティー」を認識していたことは驚嘆すべきことではないだろうか。対する、右ねじオンリーに入つた現代では、逆ねじが等しく配置されることは無くなったのである。